

## 朝田墳墓群被葬者の親族関係

田中, 良之  
九州大学九州文化史研究施設

<https://doi.org/10.15017/7183537>

---

出版情報 : 九州文化史研究所紀要. 35, pp.335-363, 1990-03-31. Kyushu Bunkashi Kenkyusho, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



# 朝田墳墓群被葬者の親族関係

田 中 良 之

## 目 次

- 一 はじめに
- 二 分析対象と方法
- 三 世代構成の復元
- 四 親族関係モデルの抽出
- 五 被葬者間のQモード相関係数
- 六 考察
- 七 おわりに

## 一 はじめに

古墳に埋葬された人たちは、墳墓から推定される被葬者数からみても、当時の社会集団の成員そのものではなく、その中から選択された人物であると考えられる。そして、被葬者選択の背後には社会的もしくは政治的規制の存在が想定される。また、その選択性ゆえに、古墳への埋葬が財や地位の継承と深く関わるものであると理解されるのであ

る（近藤一九六六）。

このような観点も含めて、古墳に埋葬された被葬者については、これまでも性構成、年齢構成、頭位などの考古学的特徴を用いて、親族関係の考察がなされてきた（小林一九五九、間壁一九六二、今井一九八二、辻村一九八二・一九八九）。これらの研究を要すると、古墳時代前半期は配偶者を含まない血縁者、後半期には夫婦を中心とした家族が葬られたと推察する小林行雄に対して、他の論者が、前半期の古墳に葬られた男女は夫婦である、もしくはその可能性が高い、と主張する点で異なっているといえよう。

これについては、理論的展望にとどまる小林はともかくとして、いずれの論も、前半期古墳に葬られた男女を夫婦であるとする確実な根拠はないようであり、いわば未検証仮説の域にとどまるものといえよう。しかし、この点については、小稿とは直接の関係がないので、別稿にゆずることにしたい。

さて、古墳時代後半期については、横穴式石室の導入、群集墳の出現などの事象を論拠として、小林の展望にそったかたちで、家父長制的家族が葬られたとする説（近藤一九六六）が一般化しているようである。

ところで、筆者らは、考古学的方法と形質人類学的方法を併用して大分県上ノ原横穴墓群被葬者の親族関係を分析し、5世紀後半～6世紀前半の横穴墓に葬られた人たちが父系の血縁者であり、家長の妻を含めて配偶者が葬られていないという予察を得た（田中他一九八五）。また、古墳時代の前半期から後半期に至るいくつもの古墳における被葬者の親族関係を分析し、通事的な展望を得て、断片的なかたちで発表してきた（田中・土肥一九八六・一九八七・一九八九a・一九八九b）。

小稿は、上記の上ノ原横穴墓群に後続する時期に築造された、山口県朝田墳墓群に対する事例研究である。

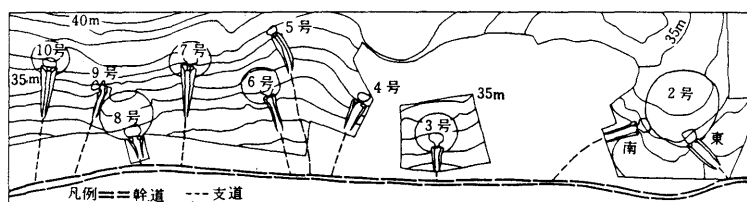


図1 朝田墳墓群(横穴墓群)配置図(山口埋文1982より)

## 二 分析対象と方法

朝田墳墓群は、山口盆地の南西、吉敷川右岸の山塊から生じた支丘上に位置し、弥生時代から中世に至る埋葬遺跡である。そのうち、小稿で分析の対象とするのは、第Ⅱ地区と呼ばれる山口市大字朝田字勝井に所在する横穴墓群である(図1)。一九八一年に山口県埋蔵文化財センターによって調査され、翌年報告書が刊行されている(山口埋文一九八二)。

遺構及び人骨の保存状態から、分析に使用しえたのは2号墳東横穴墓・4号墳・7号墳・10号墳の4基である。なお、人骨に関しては松下孝幸の報告(松下一九八二)があるが、歯冠計測値については報告されていないため、長崎大学医学部解剖学第二講座内藤芳篤教授の御厚意により歯牙の計測・観察を許可していただいた。

さて、小稿で用いる方法は、考古学的手続きに基づいて、考えうるいくつかの横穴墓被葬者の親族関係をモデル化し、それを人骨のもつ遺伝的情報によって検証するものである。すなわち、人骨の埋葬順位、副葬遺物、人骨の二次的移動などの情報と、人骨の性別・死亡推定年齢などから、被葬者たちの生前における世代構成を復元する。そして、歯冠計測値(近遠心径・頬舌径)を用いてQモード相関係数を算出し、血縁者と推定される個体間の関係に基づいて、最も妥当な親族関係モデルを選択する。さらに、これら各々の横穴墓におけるモデルを総合して、朝田墳墓群における基本モデルを抽出するわけである。

これらの方法の詳細については、別稿（田中他一九八五、土肥他一九八六、田中・土肥一九八九a・b）を参照していただきたい。また、形質人類学的方法については、他にもいくつかの方法が示されているが（水野一九八二、池田一九八五）、小稿では歯冠計測値のみを使用した。

### 三 世代構成の復元

#### 2号墳東横穴墓

直径約一一メートル、高さ二・四メートル（推定）の墳丘をもち、六メートルほどの長さの墓道を有する横穴墓である。人骨は5体が葬られていた（図2）・奥壁の方から1号人骨（性・年齢不明）、2号人骨（熟年女性）、3号人骨（壮年女性）、4号人骨（壮年女性）、5号人骨（熟年男性）という順位で葬られていた。また、各人骨の年齢について、より細かい推定値を得るため歯の咬耗度の観察を行い、1号（三〇才前後）、2号（五〇才前後）、3号（三〇才前後）、4号（三〇才前後）、5号（四〇代前半）と推定した。

さて、各人骨の位置関係をみてみると、まず、1号人骨は、奥壁に接しており、頭骨のみが遺存するが、その位置からみて原位置とは考えがたい。

2号人骨は、羨門からみて左に頭位をとり、下顎骨は動いているものの、下肢骨の位置関係はそれほど乱れていない。また、貝輪も本来あるべき左前腕近くにあることから、全体としては原埋葬の位置関係に近いと考えられる。

3号人骨は、頭骨は奥壁右端、下肢骨は2号人骨にそってまとめられている。下肢骨の位置と2号人骨との位置関係から、本来は、右側壁に置かれた高杯付近に頭があったものと考えられる。

4号人骨は、玄室ほぼ中央部に、左に頭位をとって葬られている。頭骨の両側に一对の耳環があり、左前腕には貝輪が装着されていた。また、他の四肢骨の位置関係にも乱れがないことから、原位置を保つといえる。

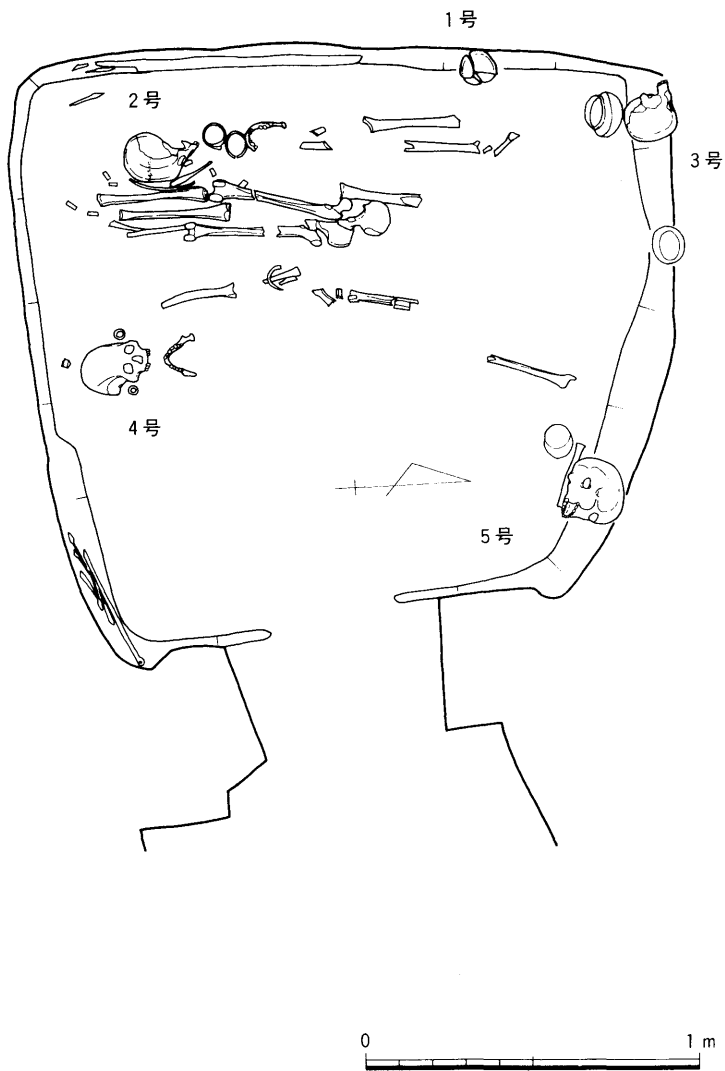


図2 2号墳東横穴墓人骨出土状態（山口埋文1982を製図）

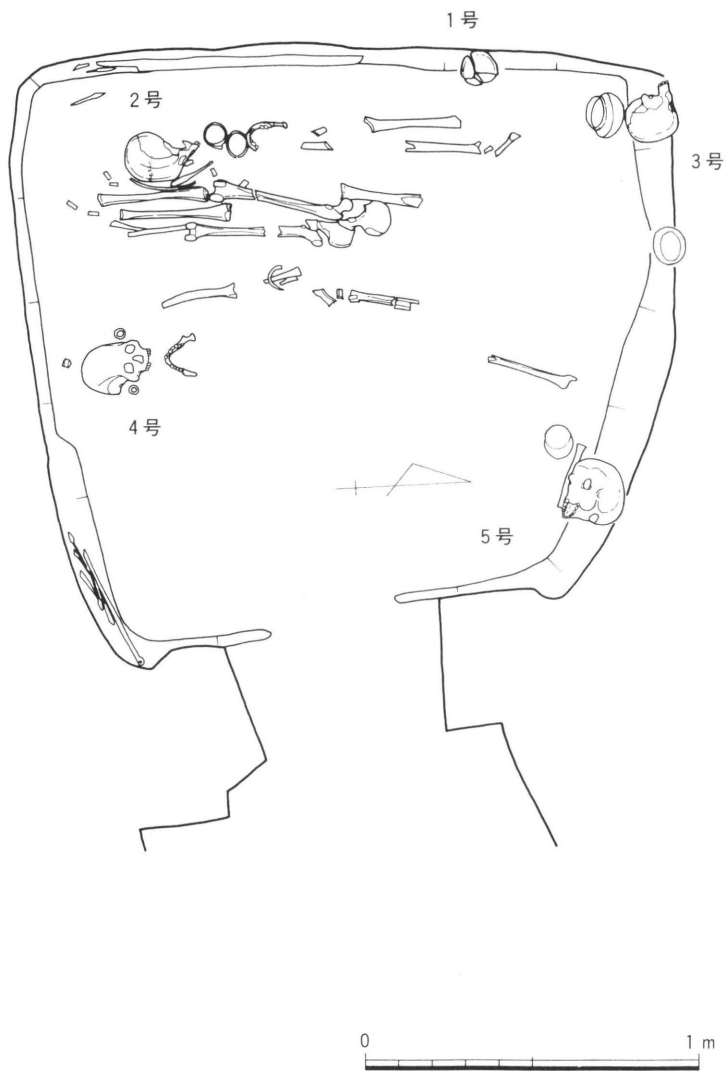
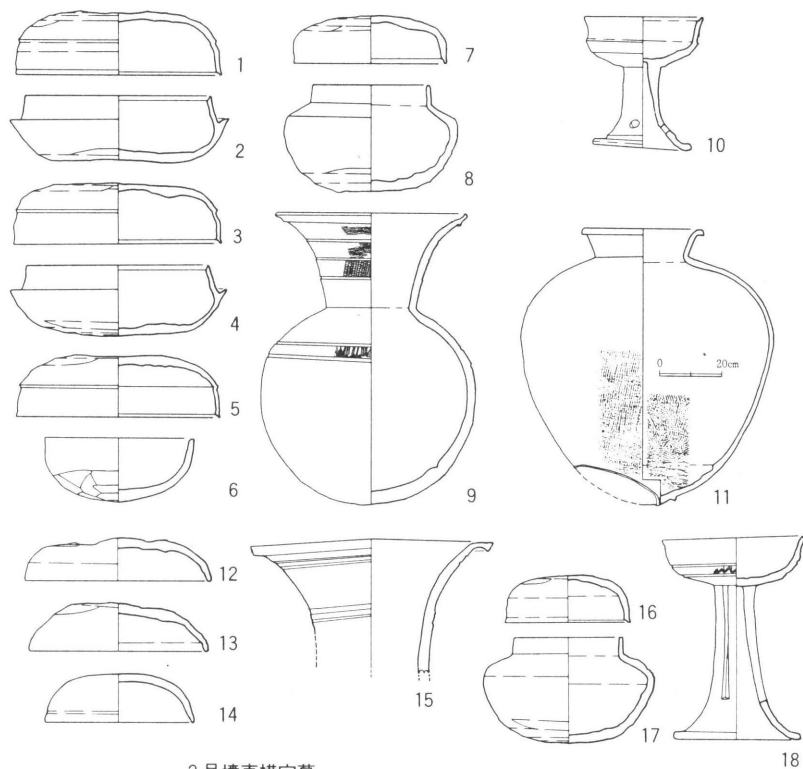
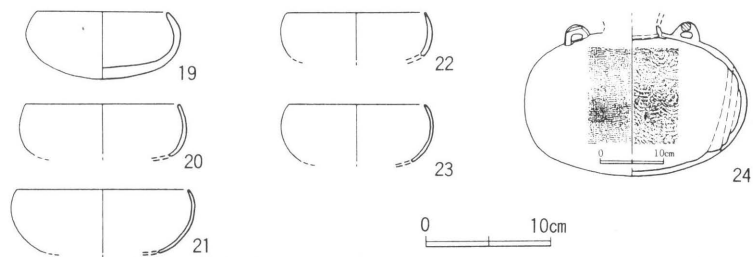


図2 2号墳東横穴墓人骨出土状態（山口埋文1982を製図）



2号墳東横穴墓  
(1~11 墳丘; 12~15 墳道; 16~18 玄室)



4号墳  
(19~24墓道)

図3 2号墳東横穴墓および4号墳出土土器 (山口埋文1982より)

5号人骨は、側壁右袖部分に頭骨と四肢骨1本のみが遺存する。明らかに葬られた原状を保つておらず、二次的に片づけられた状態である。

この2号墳東横穴墓からは三時期にわたる土器が出土している。すなわち、墳丘からは築造時のものと考えられる6世紀前半の須恵器・土師器(図3-11)、玄室内からは6世紀中葉の須恵器(図3-12-15)が出土しているのである。したがって、初葬から最終埋葬までには五〇〜六〇年以上の時期幅が認められることになる。また、玄室内の須恵器は、右側壁にあることから、3号人骨から5号人骨に伴うものと考えられる。そして、5号の頭付近にある須恵器は3号人骨脇の短頸壺の蓋であることから、本来は高杯とともに3号人骨に伴っていたものが二次的に動かされたものとしていだろう。

これらをふまえて、被葬者の生前の年齢構成を復元する。まず、1号人骨は、奥壁左の鉄刀の方向からみると頭は本来左にあつたと考えられることから、2号人骨追葬時に大きく動かされたと推定される。したがって、1号人骨の軟部組織が腐朽する時間を考慮すると、2号人骨の追葬までには相当の時間が経過したことがうかがえるのである。

これに対して、2号人骨と3号人骨の埋葬にはそれほどの時間差がなかったことが、2号人骨に大きな乱れがないという事実からうかがえる。そして、骨盤を含めて3号人骨の下肢骨が動かされていることから、後続の埋葬までに相当の時間が経過したと推定される。

そうすると、次に、この3号人骨を片付けたのが、5号人骨追葬時なのか、それとも4号人骨追葬の際に5号人骨と一緒に片付けたのが問題となる。しかし、これについては、3号人骨と5号人骨が別々の場所に片づけられていることからみると、やはり5号人骨追葬時に3号を片付けたとすべきだろう。したがって、5号人骨自体も4号人骨追葬時に片付けられていることから、各々の軟部組織の腐朽に要する時間を考慮すると、3号と5号、5号と4号の

間にはそれぞれ相当の時間を見込む必要があるわけである。

このように、2号墳東横穴墓における5体の埋葬には、2号・3号間を除けば相当の時間をおいて追葬が行われていた。そして、出土須恵器の年代観からみて、6世紀前半から後半にかけて、すなわち五〇～六〇年間にわたって断続的に埋葬が行われたことになる。そこで、仮に三つの断続期に二〇年ずつを割り当てて、各被葬者の1号人骨死亡時での世代構成をみてみると、1号人骨が五二〇～五三〇年頃に葬られたとして、1号(三〇才前後) ↓ 2号(五四〇～五五〇年、三〇才前後) ↓ 3号(五四〇～五五〇年、一〇才前後) ↓ 5号(五六〇～五七〇年、一〇才以下) ↓ 4号(五八〇～五九〇年、マイナス三〇才前後) となる。そして、2号人骨の推定死亡年代が副葬須恵器の示す年代と矛盾することがないことから、1号・2号間の間隔はほぼこれを前後するものとして大過ないだろう。また、最終埋葬の時期も動かないことから、右のように二十年ほどではないにしても、3号・5号間、5号・4号間に一定の間隔(例えば一〇年程度)を考えても、4号人骨は3号・5号と同世代にはなりえない。したがって、これらは三世代の構成となるのである。

1号人骨は、骨自体では性判定が不能であったようだが、鉄刀が副葬されていたことから、まず男性と考えて間違いはない。そうすると、これら三世代にわたる被葬者は、二世代の男女(1号・2号、5号・3号)と三世代目の女性(4号)という構成になる。

#### 4号墳

墳丘を伴わない横穴墓で、約五メートルの墓道をもち、人骨は3体分が検出されている(図4)。1号人骨は壮年の男性、2号人骨は壮年女性、そして3号人骨が熟年女性と推定されている。これらは全て二次的に動かされており、埋葬順位は明らかにしえてない。しかし、3体とも動かされていることは、これらを片付ける契機となった最終埋葬が行われたことを示しているのである。そこで、もう1体の被葬者をX号とする。

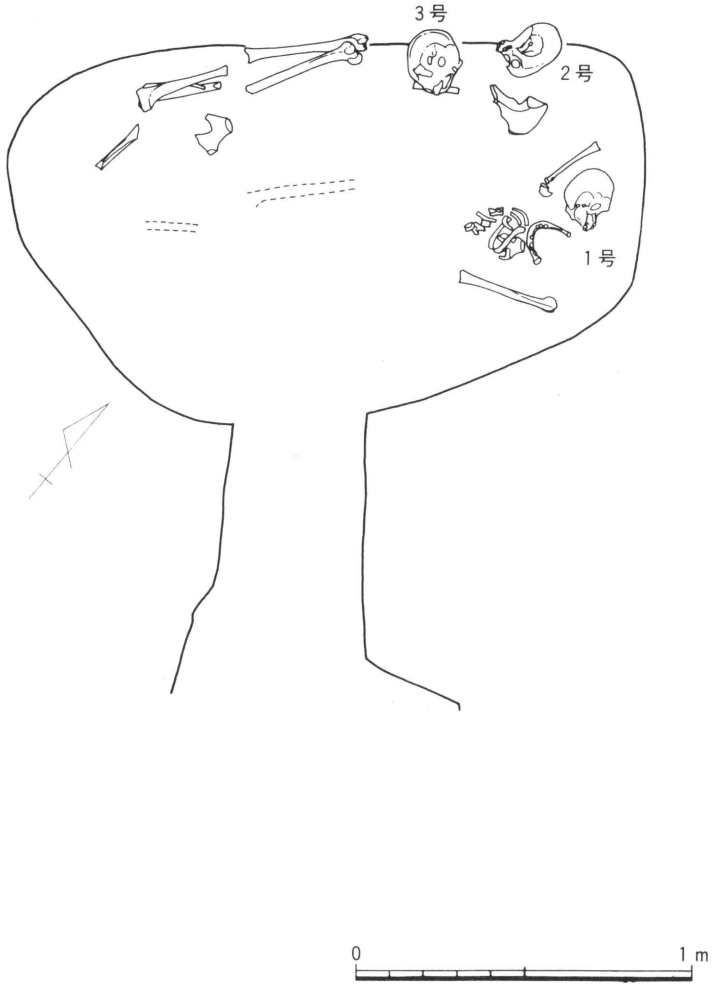


図4 4号墳人骨出土状態 (山口埋文1982を製図)

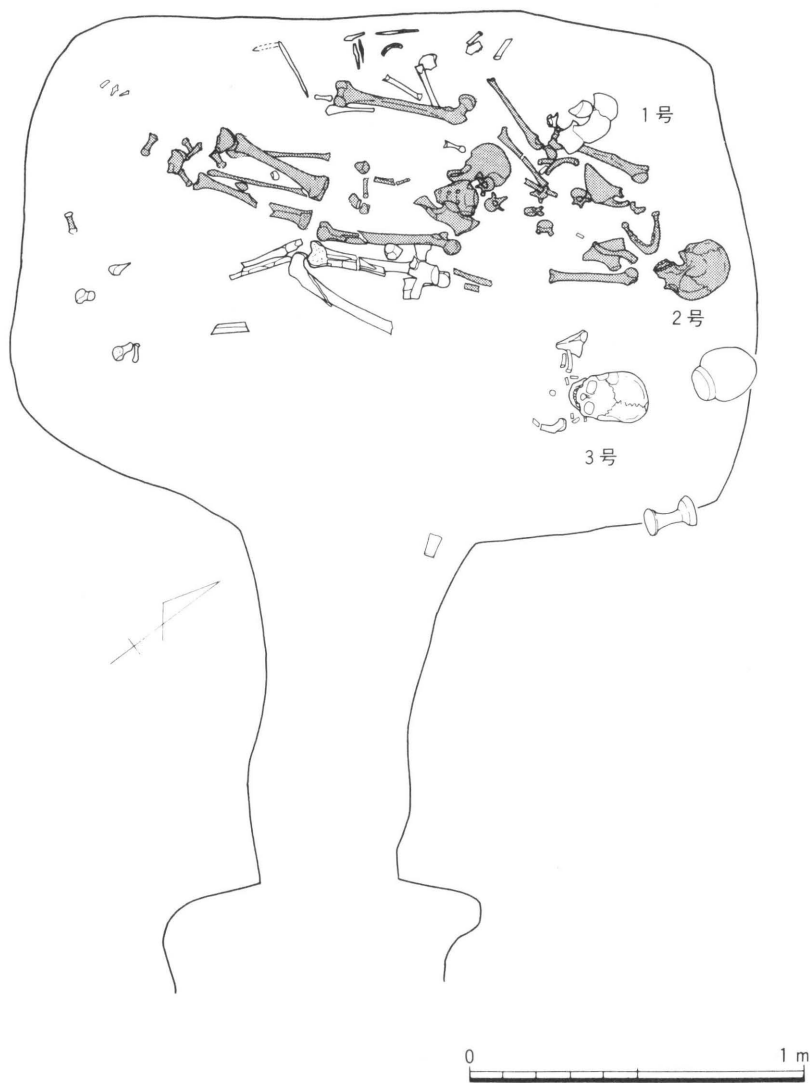
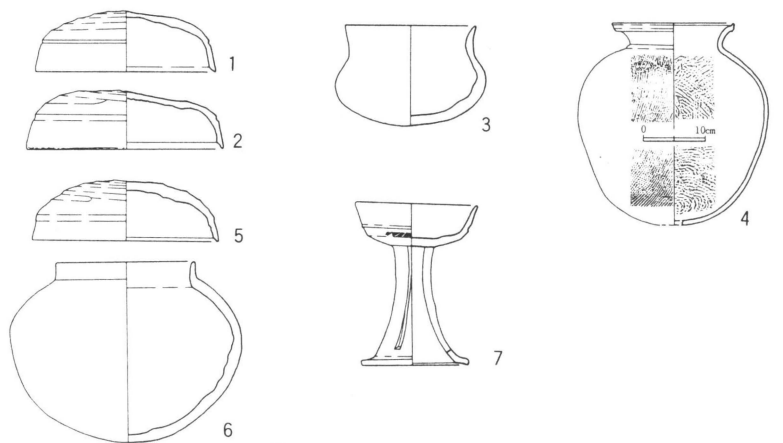
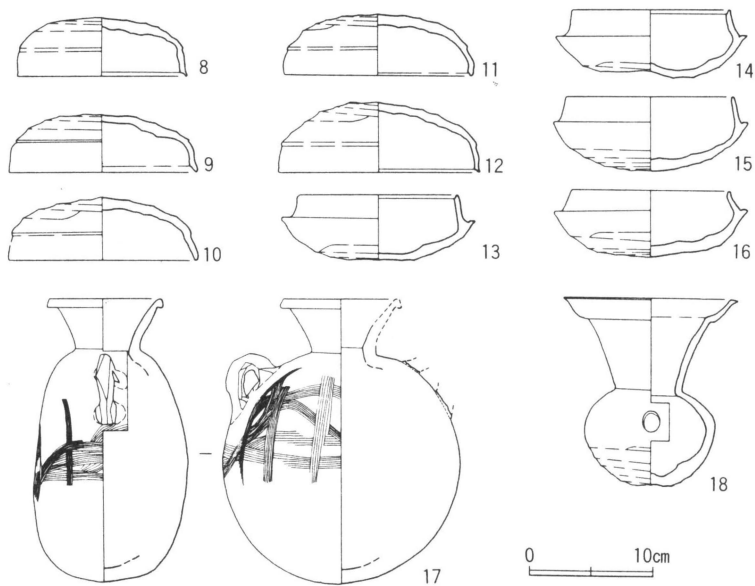


図5 7号墳人骨出土状態 (山口埋文1982を製図)



7号墳  
(1~4 墓道; 5~7 玄室)



10号墳  
(8~18 墓道)

図6 7号墳および10号墳出土土器 (山口埋文1982より)

さて、出土状態からみるとこれらの埋葬順位は不明であるが、2号墳東横穴墓や後述の10号墳、時期はやや上が大分県上の原横穴墓群の例（村上他一九八五）などからみると、男性（1号人骨）が初葬であった可能性が高い。また、墓道から最終埋葬時のものと思われる6世紀中葉の須恵器が出土しており（図3）、この横穴墓群の上限が6世紀前半までしか上りえないことから、4号墳における埋葬は長くとも二〇〜三〇年間で行われたと考えられる。

これらをつまえて、1号人骨死亡時の世代構成を復元してみると、1号人骨が片付けられているので、後続の埋葬までに一〇〜二〇年の間隔を考えると、3号人骨は1号と同世代に、2号人骨は1号・3号の次世代になる。そして、さらにこれらから相当の時間をへてx号人骨が葬られたことになる。したがって、4号墳の被葬者は、第一世代の男女（1号・3号）と第二世代の女性（2号）とx号という二世代の構成であったと推定される。

#### 7号墳

長径六・六メートル、短径六・二メートルの墳丘をもつ横穴墓で、墓道の長さは七・一メートルを測る。人骨は3体分が検出された（図5）。1号人骨は、最も奥に位置する幼児骨で、原位置を保っているとはいえない。難い。

2号人骨は、中央の壮年男性で、頭骨は左側へと転がり、左右の大腿骨は外側に半回転していて、骨盤の仙腸関節もややずれている。これらの所見から2号人骨がやや動かされていることがあえるが、その他の骨の位置関係は概ね原位置を保っており、玉類の位置関係とも矛盾はない。したがって、2号人骨は、ほぼ埋葬されたままの状態を保っていると考えられる。また、1号人骨との関係は、報告では1号↓2号の順位を考えてあるが、1号の頭骨が2号の上腕骨上にあること、この上腕骨は、1号の下肢骨上にある2号大腿骨と異なり、原位置を保つことから、2号人骨の方が先に葬られたとすべきであろう。3号人骨は、羨門より位置する壮年女性で、頭骨と右の鎖骨・上腕骨および左上腕骨や玉類の位置関係には乱れがなく、また、右の寛骨・大腿骨・脛骨も同様である。したがって、この3号人骨が最後の被葬者と考えられよう。しかし、下肢の位置をみると、頭と両肩から推定される位置よりも奥壁側によつ

ており、押しやられた印象も受ける。つまり、3号人骨は最後の被葬者ではない可能性もあるのである。さらに、上半身と下半身が別個体と考えると、下半身の個体を奥へ押しやって上半身の個体が最後に葬られたという可能性すらでてくる。とはいえ、とりあえずは3体の埋葬であつたとして、世代構成を考えてみよう。

さて、7号墳における埋葬順位は、前記のとおりであるが、2号人骨に大きな乱れがないことから、1号人骨が2号人骨埋葬後に追葬されるまでの間隔は短いもの（数年以内）であつたと考えられる。また、3号人骨追葬時に、1号人骨が奥壁よりに片づけられているため、ある程度の時間をへて3号が追葬されたと考えられよう。しかし、幼児の軟部組織腐朽はそれほど時間がかかるものではないことから、やはり、数年ほどの時間をおいて3号人骨が追葬されたと考えうる。そして、2号人骨の右大腿骨が1号人骨の下肢骨上につていることからみると、この大腿骨が外側へと半回転したのは1号人骨の片付けを終えてからのことであり、2号人骨の他の骨に乱れがないこととあわせると、2号から3号までの埋葬間隔は大きなものではないと考えられる。そして、7号墳では、玄室内の3号人骨頭骨付近の須恵器（図6-6-6-7）および最終埋葬に伴うと考えられる墓道出土の須恵器（図7-1-1-4）が得られているが、いずれも6世紀中葉のものである。

したがって、これらのことから、7号墳被葬者の生前における世代構成は、2号・3号が第一世代の男女で、1号が第二世代の幼児という、二世代構成であつたと推定される。ただし、前記のように、3号人骨が動かされているか、上半身と下半身が別個体である場合には、須恵器の時期幅の範囲内で最終埋葬までの時間を考慮する必要がある。そして、その場合は、最終被葬者は第二世代である可能性が強くなるだろう。

## 10号墳

長径五・八メートル、短径五・四メートルの墳丘をもち、長六・七メートルの墓道を有する横穴墓である。人骨は4体が検出されている（図7）。1号人骨は、奥壁よりに位置する熟年女性で、歯の咬耗から五〇才前後と推定される。

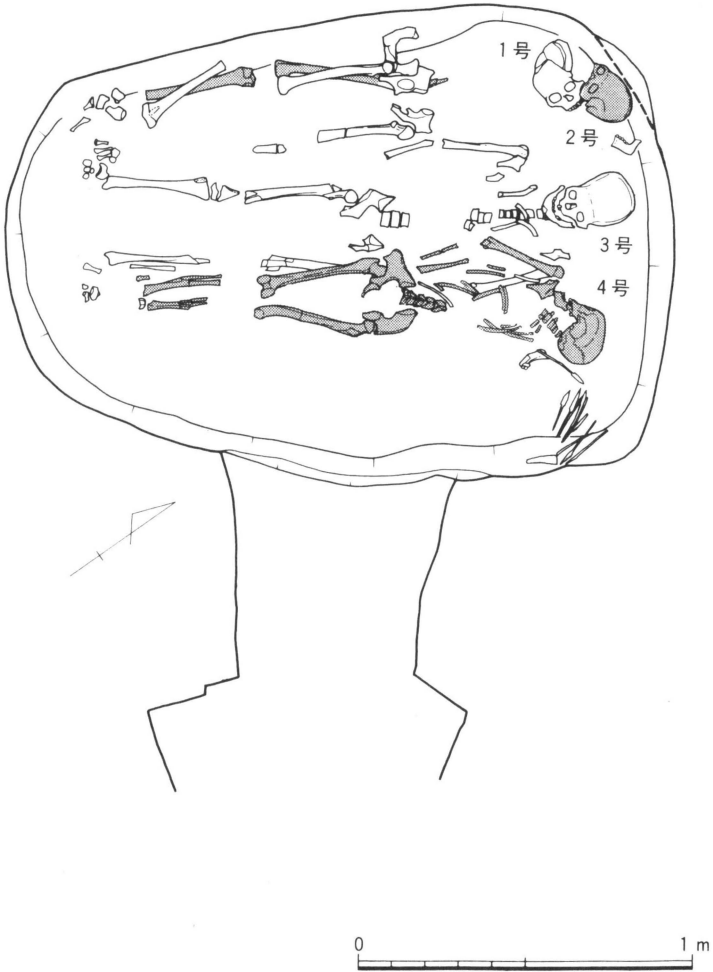


図7 10号墳人骨出土状態 (山口埋文1982を製図)

頭骨と下顎骨が遊離しており、両者の間に2号人骨頭骨がある。骨盤以下の下肢骨は、1号人骨の下肢骨上の上のつており、頭の状態とあわせて、奥壁側へと二次的に移動されたことを示している。しかし、左右の寛骨と大腿骨、およびこれら相互の位置関係は大きく乱れたものではないことから、これらが関節もしくはそれに近い状態で、この位置に移動されたことを示している。

2号人骨は、奥壁にそって片づけられた壮年男性で、歯の咬耗からみると四〇才近いと思われる。1号人骨の下半身下であり、明らかに1号よりも先に葬られている。

3号人骨は、玄室中央に葬られた壮年男性で、歯の咬耗からみると三〇才前後と推定される。1号人骨を片づけてこの位置に葬られたと考えられ、全身の骨に位置関係の乱れはない。

4号人骨は、最も羨門よりに位置する壮年女性で、歯の咬耗からみると三〇才前後と推定される。伏臥の姿勢で葬られ、左半身は3号人骨上にのることから、10号墳における最終被葬者といえる。また、4号人骨の手前、玄室右袖部に集中する鉄鎌・刀子は、切先がそろわないことから二次的にまとめられたものと考えられており、この人骨に伴うものではない。また、4号人骨が上にのせられたにもかかわらず、3号人骨に乱れがないことは、3号の軟部組織の腐朽が完了する前に4号が追葬されたことを示しており、2体の埋葬時期の近さを物語るものである。

さて、これらをふまえて、10号墳被葬者の生前の世代構成を復元する。まず、2号人骨と1号人骨の埋葬間隔は、2号人骨が奥壁にそって片づけられていることから、相当の時間を見込む必要がある。次に、1号・3号間は、1号下肢骨が関節状態かそれに近い状態のまま奥へと移されていることから、数年以内の間隔と考えられる。そして、3号と4号の間は、前記のとおり、時間的に近接して葬られたといえる。したがって、2号・1号間をかりに一〇年ほど、1号・3号間を五年ほどとして、2号人骨死亡時の世代構成を求めると、2号(四〇才近くの男性) ↓ 1号(四〇才前後の女性) ↓ 3号(二〇才ほどの男性) ↓ 4号(二〇才ほどの女性) という二世代の構成となる。2号・1号

間を長くすると三世代の可能性もでてくるが、墓道中から最終埋葬に伴うと思われる6世紀中葉の須恵器(図6)が出土しており、この横穴墓群の上限が遡っても6世紀前半であることから、やはり二世代の構成がもっとも妥当といえる。

#### 四、親族関係モデルの抽出

横穴墓の被葬者は、これまでほとんどの研究者が予想していたとおり、親族であったことが明らかにされつつある(田中他一九八五、池田一九八六等)・したがって、朝田墳墓群においても、姻族を含む親族が葬られたという前提のもとに、同世代の男女が夫婦か兄妹(姉弟)なのか、あるいは後者の場合、次世代の被葬者は男女どちらの子になるのか、という点が問題になってくる、そこで、同世代男女をA(夫婦)、B(兄妹・姉弟)とし、次世代以降はa、bと小文字で表記する。また、単体か同世代が同性の場合はC、cとし、さらに、次世代被葬者との関係については、I(父系)、II(母系)という形で示す。したがって、仮に三世代にわたる父系の夫婦が葬られる場合には、IAaaという形で表せるわけである。

そうすると、2号墳東横穴墓の場合、二世代にわたる男女と三世代目の女性という構成なので、

IAac、IIAac、IAbc、IIAbc

IBac、IIBac、IBbc、IIBbc

というケースが考えられる。

同様に、4号墳をみてみると、第一世代の男女と第二世代の女性とx号という構成であった。したがって、x号が女性であれば、

IAc、IIAc、IBc、IIBc

x号が男性であれば、

I A a、II A a、I B a、II B a

I B b、II B b、I A b、II A b

というケースとなるう。

7号墳は、同世代の男女と次世代の幼児という構成であつたので、

I A c、II A c、I B c、II B c

というケースが考えられる。また、前述のように、3号人骨が最終埋葬でないか、3号の上・下半身が別個体のものである場合を考慮しても、これらのモデルに収めうる。

10号墳は、二世代にわたる男女という構成なので

I A a、II A a、I A b、II A b

I B a、II B a、I B b、II B b

というケースが考えられる。

次に、歯冠計測値を用いたQモード相関係数を求め、被葬者間の血縁関係を推定することによって、以上の検証を行う。

### 五 被葬者間のQモード相関係数

歯の保存状態の関係で、必ずしも血縁者推定に有効な組み合わせが十分得られたとはいえないが、結果を表1・2・3に示す。

2号墳東横穴墓では、1号・2号人骨の歯の保存が不良なため、3号・4号・5号が主とした分析対象となつた。この分析では、便宜的に複数の有効な組み合わせにおいて○・五〇〇以上の値が得られたペアが血縁者であつたと推定

表1 2号墳東横穴墓被葬者のQモード相関係数

菌種	2号-3号	2号-4号	2号-5号	3号-4号	3号-5号	4号-5号
$\frac{P^1 M^1}{P_1 M_1}$	—	-0.193	—	—	—	—
$C P^1 P^2 M^1$	—	—	—	-0.610	0.135	-0.026
$\frac{P^1 P^2 M^1}{C P^1 P^2}$	—	—	—	-0.615	0.656	-0.168
$\frac{C P^1 P^2 M^1}{C P_1 P_2}$	—	—	—	-0.121	—	—
$\frac{C P^1 P^2 M^1}{C P_1 P_2}$	—	—	—	0.104	—	—
$\frac{C P^1 P^2 M^1 M^2}{C P_1 P_2}$	—	—	—	0.280	—	—
$\frac{C P^1 P^2 M^1 M^2}{C P_1 P_2 M_2}$	—	—	—	0.228	—	—
$P^1 P^2 M^1 M^2$	—	—	—	0.441	0.676	0.382
$C P^1 P^2 M^1 M^2$	—	—	—	0.419	0.310	0.300

表2 7号墳被葬者のQモード相関係数

菌種	1号-2号	1号-3号	2号-3号
$\frac{I^1 I^2 C M^1}{I_1 I_2 C M_1}$	—	—	0.129
$\frac{P^1 M^1}{P_1 M_2}$	—	—	0.370
$\frac{I^1 I^2 C M^1}{I_2 M_1}$	0.472	-0.138	0.071
$\frac{I^1 I^2 C P^1 M^1}{I_2 C P_1 P_2 M_1 M_1}$	—	—	0.520
$\frac{C P^1 M^1}{C P_1 P_2 M_1 M_2}$	—	—	0.483
$P_1 P_2 M_1 M_2$	—	—	0.309

表3 10号墳被葬者のQモード相関係数

歯 種	1号-2号	1号-3号	1号-4号	2号-3号	2号-4号	3号-4号
$\frac{I^1 I^2 C P^1 P^2 M^1}{I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1}$	————	————	————	0.593	0.349	0.242
$\frac{P^1 P^2 M^1 M^2}{P_1 P_2 M_1 M_2}$	————	————	————	————	————	0.285
$\frac{I^1 I^2 C P^1 P^2}{I_1 I_2 C P_1 P_2}$	————	————	————	0.620	0.107	0.034
$\frac{C P^1 P^2 M^1}{C P_1 P_2 M_1}$	————	————	————	0.574	0.454	0.253
$\frac{P^1 P^2 M^1}{P_1 P_2 M_1}$	————	————	————	0.410	0.538	0.499
$\frac{I^1 I^2 C M^1}{I_1 I_2 C M_1}$	0.207	0.530	0.168	0.613	0.685	0.417
$\frac{P^1 M^1}{P_1 M_1}$	-0.394	0.204	0.296	0.362	0.577	0.567
$I^1 I^2 C P^1 P^2 M^1 M^2$	————	————	————	0.826	0.586	0.461
$I^1 I^2 C P^1 P^2 M^1$	————	————	————	0.836	0.646	0.657
$. C P^1 P^2 M^1$	————	————	————	0.907	0.438	0.591
$P^1 P^2 M^1$	————	————	————	0.839	0.417	0.774
$I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2$	————	-0.167	0.142	————	————	-0.268
$\frac{I^1 I^2 C}{I_1 I_2 C}$	-0.229	-0.058	0.196	0.290	0.572	0.556
$\frac{I^1 I^2 C P^1 P^2 M^2}{I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1}$	-0.210	0.137	-0.135	0.643	0.458	0.329
$I^1 I^2 C P^1 P^2 M^2$	-0.006	0.402	-0.095	0.829	0.601	0.478
$\frac{P^1 P^2 M^2}{P_1 P_2 M_1}$	-0.414	-0.278	-0.372	0.562	0.467	0.215
$\frac{C P^1 P^2 M^2}{C P_1 P_2 M_1}$	-0.317	-0.187	-0.274	0.611	0.451	0.156

朝田墳墓群被葬者の親族関係

しているが（土肥他一九八六）、3号・5号間（第二世代の男女間）において複数の組合せで〇・五〇〇以上の値が得られた（表1）。

4号墳では、表示してはいないものの、1号・2号間（第一世代男性と第二世代女性間）では $P_1M_1M_2$ の組合せで〇・五五一、1号・3号間（第一世代の男女間）で $P_2M_1M_2$ の組合せで〇・257の値が得られている。しかし、これらの組合せは、血縁者の推定にあまり有効なものではなく、結果の信頼性は低い。

7号墳は、1号人骨が幼児であるため、2号・3号間（第一世代男女間）の分析が主となったが、一つの組合せで〇・五二〇という値が得られた他はいずれも〇・五〇〇以下の値である（表2）。

10号墳は比較的多くの組み合わせで分析できた。表3をみると、2号・3号間（第一世代男性と第二世代男性間）、2号・4号間（第一世代男性と第二世代女性間）、3号・4号間（第二世代の男女間）において、それぞれ複数の組み合わせで〇・五〇〇以上の値が得られている。また、一つの組み合わせだけはあるが、1号・3号間（第一世代女性と第二世代男性）においても高得点が得られている。これらに対して、1号・2号間（第一世代男女）は、高得点はおろかほとんどの組み合わせでマイナス値が得られた。

## 六 考 察

朝田墳墓群においては4基の横穴墓が分析された。これらは、相互に変異はあるものの、推定された世代構成においていくつかの共通性があった。その一つは第一世代は男女で構成されるというものである。そしてもう一つは、第二世代が、第一世代とは異なつて必ずしも男女という規則性はなく、単体や同性の場合もありうるというものである。

このように、横穴墓へ誰を埋葬するかにあつては、ある規則があつたようである。そこで、これをふまえて、横穴墓ごとの変異を包摂するモデルを抽出する必要がでてくる。

さて、前章における計算結果をみると、いずれの横穴墓においても血縁者と推定されるペアが認められ、横穴墓の被葬者がやはり親族で構成されていることを示している。さらに、各横穴墓ごとにモデルの検証を行ってみると、2号墳東横穴墓では第二世代の男女が血縁者と推定されるので、先にあげたモデルのうち、IAac、IIAac、IBa c、IIBa cが棄却され、IAbc、IIAbc、IBbc、IIBbcが残る。

4号墳では、1号・2号間の分析に用いた歯の組合せが仮に有効なものであったとしても、第一世代と第二世代の男女間であるため、モデルの選択にはいたらない。ただ、第一世代の男女間の分析に用いたP<sub>1</sub>M<sub>1</sub>M<sub>2</sub>の組合せにおける値が実状を反映したものならば、第一世代を兄妹（姉弟）としたモデルが棄却される可能性も出てくる。

7号墳は、逆に第一世代の男女間で高い値が得られている。しかし、これは一つの組合せのみにおいてであって、他の組合せでは必ずしも高い値が得られているわけではない。この7号墳については10号墳の検討の後に再びふれることにしよう。

10号墳は、第一世代の男性と第二世代の男女との間でそれぞれ高い得点が得られており、親子の関係であったと推定される。また、第二世代男女の間でも高い値が得られており、第二世代は夫婦というより兄妹（姉弟）であった可能性が高い。さらに、第一世代の男女間で低い値のみが得られたことは、第一世代が血縁者ではないペア、すなわち夫婦であった可能性を示すものである。したがって、モデルIAa、IIAa、IBa、IIBa、IBb、IIBbは棄却され、IAb、IIBbが選択されることになる。

ところが、さきに評価を保留した7号墳の分析結果は、一つの組み合わせのみとはいえ、第一世代の男女で高い値が得られたというものであった。つまり、これを積極的に評価すれば、第一世代に関しては10号墳とは逆の結果となってしまうのである。

しかし、7号墳の結果を積極的に評価できない理由がある。まず、歯冠計測値を用いた方法では、数%から十数%

の「他人のそら似」が介在することである。そのため、この方法では複数の組み合わせで・五〇〇以上の値をとるペアを血縁者と推定することを原則としており、(土肥他一九八六)これに従えば、7号墳における結果を積極的には評価しえないのである。また、仮に7号墳の2号人骨と3号人骨が血縁者であったとしても、たまたまイトコ同士の結婚による夫婦であった可能性もある。というのも、イトコ同士まで親等が離れると血縁者推定に有効でなくなる組み合わせ( $P^1M^1P^1M^1$ など)では値が落ちていくからである。さらに、7号墳では先述したとおり、3号人骨の上半身と下半身が別個体であった可能性もあり、その場合は第一世代の男性と第二世代の女性との間に高い値がでていることになるのである。

これらの理由から、7号墳においても第一世代は兄妹・姉弟ではなく、10号墳と同様に夫婦であったと考えられよう。したがって、4基の被葬者の構成を統一的に理解しうるモデルは、第一世代が夫婦、第二世代が兄妹・姉弟というI A b、II A bが選択される。

次に、この二つのうちどちらが朝田墳墓群被葬者の親族原理を表すのが問題となる。これについては、第一世代と第二世代が親子関係にあるため、歯冠計測値を用いた分析で選択は不可能である。しかし、初葬者がいずれも男性と考えられること、すなわちこれらの横穴墓が成人男性の死を契機として築造されたと考えられることから、母系というよりは、男性の家長を中心とした父系の親族関係であったとすべきであろう。したがって、最後に残った基本モデルはI A b(家長夫妻とその子たち、父系)であり、三世代構成の2号墳東横穴墓における最終被葬者は、この基本モデルに基づいて、第二世代男性の子ということになる。

ところで、このモデルでは第一世代と第二世代の構成は異なるものである。すなわち、第一世代は家長夫妻であるにしても、第二世代は家長の子であること以外には性・年齢に制約がない。また、7号墳においては、次世代の家長と考える成人男性は明らかに葬られていない。つまり、第二世代は、第一世代の家長の子ではあっても、次世代の

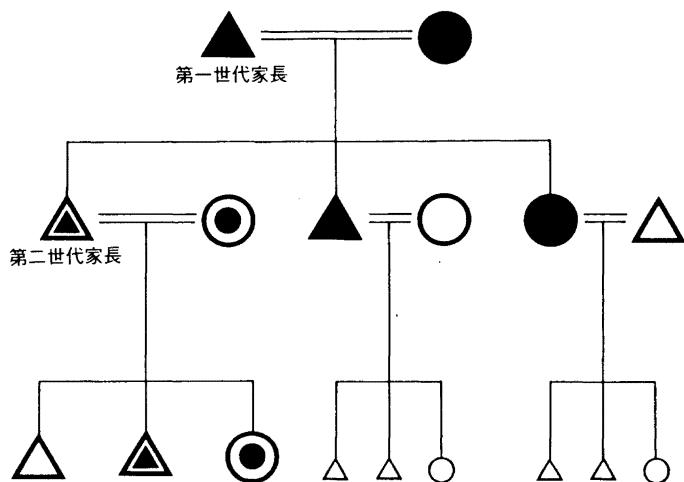


図8 朝田墳墓群被葬者の親族関係モデル

▲男性 ●女性  
 ▲●、▲○がそれぞれ同じ墓に葬られ、△○で示した人物は横穴墓には葬られない

家長とはならなかった人たちによって構成されていると考えられるのである。

したがって、これらに基づいて朝田墳墓群における埋葬システムを累代的に示すと、次世代の家長は新たな墓を築造するというものになる(図8)。そして、調査された10基の横穴墓群は、築造年代において二期に分かれるのである。すなわち、6世紀前半の須恵器を出土する2号墳(東横穴墓・6号墳・8号墳(報告書におけるI期横穴墓))と6世紀中葉が築造時期である2号墳(南・4号墳・5号墳・7号墳・9号墳・10号墳(同II期横穴墓))であり、3号墳も玄室の構造などからI期に属すると考えられている(山口埋文一九八二)。そして、これらの横穴墓群は東から、2号墳(東(I期))→2号墳(南(II期))→3号墳(I期)→4号墳(II期)→5号墳(II期)→6号墳(II期)→7号墳(III期)→8号墳(I期)→9号墳(II期)→10号墳(II期)というように、おおむねI期横穴墓とII期横穴墓が交互に位置している(図1)。報告書中では、墳丘の有無によって副葬品に格差が認められることから、隣接するI期横穴墓とII期横

穴墓がそのまま対応するのではなく、6世紀中葉に至って横穴墓築造の階層が拡大したとの想定もなされている。しかし、その一方では、2号墳東横穴墓と南横穴墓は墳丘を共有し、9号横穴墓も8号横穴墓の墳丘を切って築造されていることから、これら隣接する横穴墓間に何らかのつながりがあったことも示唆されている（山口埋文一九八二）。そこで2号墳の東横穴墓と南横穴墓とを検討してみる。まず、東横穴墓に葬られた家長（1号人骨）が死亡した6世紀前半を五二〇～五三〇年頃とすると、1号人骨は三〇才前後で死亡していることから、次世代の家長はこの時点で一〇才前後だったことになる。そして、この人物が、やはり三〇才前後で死亡したとすると五四〇～五五〇年頃、四〇才前後だと五五〇～五六〇年頃となり、南横穴墓の築造年代と合致することになるのである。

4号墳は、隣接する3号墳との連続が考えられるが、間に未調査区が入ることと、墳丘をもつ3号墳に対して4号墳は墳丘をもたないことから、いちがいに連続するとはいいたくない。また、4号墳の須恵器は墓道からの出土であり、最終埋葬に伴うと考えられることから、初葬は6世紀前半にまで上るかそれに近い中葉と考えられる。そこで、4号墳における家長と目される1号人骨が壮年（齒の咬耗からみるとおおむね三〇代）で死亡したとすると、4号墳より二〇年ほど前となり、3号墳の築造時期と矛盾しない。さらに、4号墳が、3号墳とではなく5号墳と連続するとすると、4号墳1号人骨死亡時には5号墳の家長は一〇代と考えられ、やはり三〇代で死亡したとすると、5号墳の築造時期に重なることになるのである。

7号墳についても同様である。7号墳は墳丘をもつという点と位置関係や墓道の方向などから8号墳と連続すると考えられる。そして、家長と考えられる2号人骨は壮年で死亡していることから、先代の家長が壮年から熟年にかけて死亡したとすると、その墓の築造は6世紀の前半代まで上ることになり、8号墳の築造年代と一致する。さらに、7号墳2号人骨の次の家長は、7号墳築造時には一〇代と考えてよからうが、この人物が三〇代から四〇代で死亡し葬られたとすると、6世紀後半にまで下ってしまう。そして、8号墳の墳丘を切って造られた9号墳の築造年代はこ

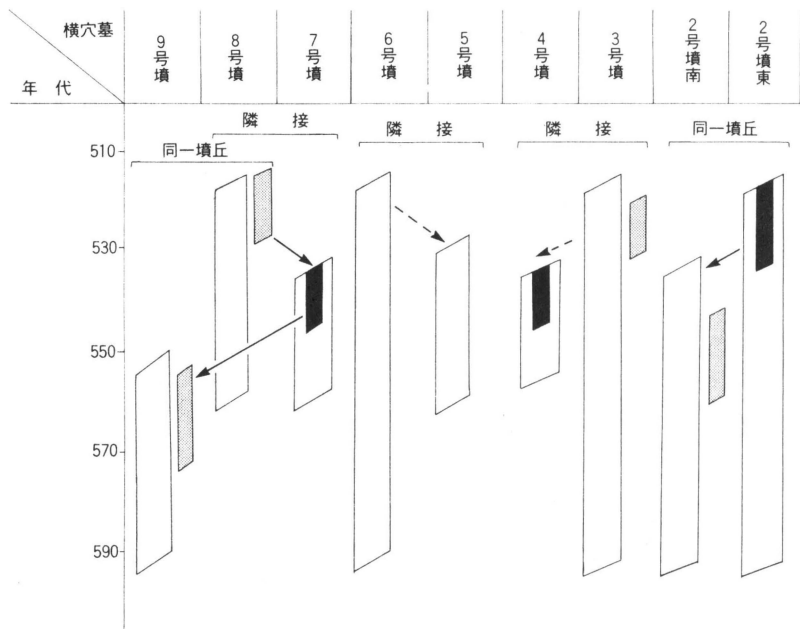


図9 隣接する横穴墓および家長の代的連続  
 □は横穴墓が使用された時期幅。■は家長と考えられる男性人骨の推定死亡時期。▣は■の男性人骨の死亡推定年令から求められた先行世代および次世代家長の推定死亡時期。各横穴墓の築造時期と合致する。(5号墳と6号墳については、人骨が出土していないため、横穴墓の時期幅のみを示した。)

の6世紀後半なのである。したがって、この一角では7号墳を介して、8号墳↓7号墳↓9号墳という系譜をたどりうる。

10号墳は、調査区の端に位置し、隣接するI期横穴墓が明らかでないため、このような系譜はたどれない。しかし、これまでみてきたように、朝田墳墓群においては、隣接し墳丘を共有したりもする横穴墓が、代的・家系的に連続するというものであった(図9)。そして、このようなあり方は、先に示した親族関係の分析に基づく埋葬システム(図8)と合致するものである。

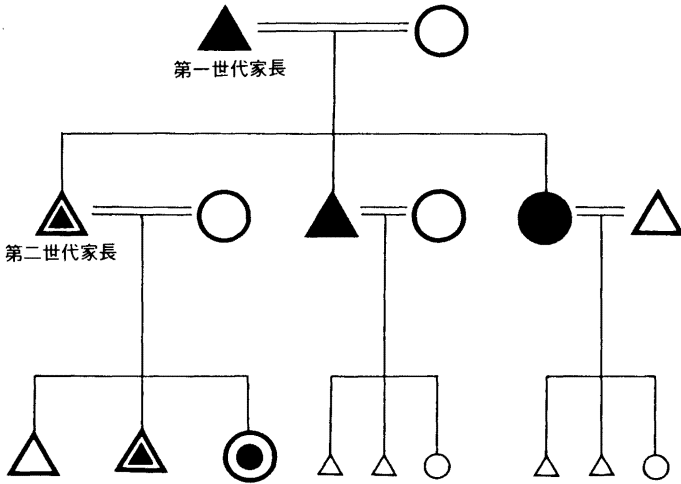


図10 上ノ原横穴墓群被葬者の親族関係モデル

▲男性 ●女性  
 ▲●、▲◎、△◎がそれぞれ同じ墓に葬られ、△○で示した人物は横穴墓には葬られない  
 (田中・土肥1989bより)

ところで、大分県上ノ原横穴墓群における親族関係は、家長とその子という基本構成であった(田中他一九八五)。そして、これもまた累代的に示せば、次世代の家長は新たな墓を築造するというものである(図10)。この上ノ原のモデルと朝田のモデルは、父系直系のものであるという点、しかし、次世代の家長は新たな墓を築造し、したがって二世代目は家長とならなかつた子(男女あり)で構成されるという点で共通している。しかしながら、家長の妻が葬られるという点が大きく相違しているのである。

これについては、図に示した上ノ原横穴墓群のモデルは5世紀後半から6世紀前半にかけての横穴墓の資料から抽出されたものであり、朝田墳墓群とは時期差があることから、6世紀前半から中葉にかけて上ノ原のモデルに家長の妻が加わるというかたちで朝田のモデルが出てきたと評価される。

筆者らは、これまでいくつかの事例をもとに、5世紀中葉までの古墳における複数埋葬は兄妹・姉弟(ヒメ・ヒコ)を中心としたキョウダイ原理に基づいていた

ことを示してきた(田中・土肥一九八六、一九八七、一九八九a・b)。そして、このモデルから上ノ原のモデルまで一貫して、配偶者は同じ墓に葬られることはないとしてきた。ところが、朝田のモデル、すなわち6世紀前半から中葉に至ってようやく家長の妻が葬られることになったわけである。

これは、5世紀中葉までの血縁を重視した原理から、キョウダイが脱落して男性家長を中心とした父系の直系家族が成立し、朝田墳墓群の段階に至って家長の妻(すなわち次世代家長の母)も葬られるようになり、家長夫妻を中心とした埋葬原理が成立した、という流れでとらえることができるだろう。

最後に、上ノ原横穴墓群では第二世代の女性の寛骨に前耳状溝が認められたものがあり、これは経産婦であった可能性を強く示すことから、女性は結婚しても死後は父の墓に追葬されたことが指摘されている。(田中他一九八五)。朝田墳墓群においても、少なくとも2号墳東横穴3号人骨、10号墳4号人骨にこの前耳状溝が認められ、第二世代の女性には未婚者ではなかった可能性が強い。そして、このことは、婦葬や別居婚の可能性をも示唆するものであるといえよう。上ノ原はともかく朝田の親族関係モデルにおいてもなお第一世代と第二世代で構成が異なっていることは、夫婦を中心とした埋葬原理がまだ貫徹されていなかったことを示しており、この時期の特質と古代の戸籍との連続性を示すものとして興味深い。これらについては別稿にゆずることにしたい。

## 七 おわりに

小稿を終えるにあたって、朝田墳墓群出土人骨の計測・観察をお許し頂きかつ便宜をはかり頂いた長崎大学解剖学第二講座内藤芳篤教授および教室員の皆様、調査資料の再検討に便宜をおはかり頂いた山口県埋蔵文化財センター中村徹也次長、前田耕次、乗安和三三の各氏に感謝したい、また、小稿は、筆者が九州大学医学部解剖学第二講座在籍中、永井昌文先生の指導のもとで土肥直美氏とともに行ってきた共同研究をふまえたものである。御両者の芳名を記して

謝意を表したい。さらに、九州大学考古学研究室中園聡氏には製図などに御協力を頂き、以下に記す方々にも有益な御教示を賜った。未筆ながら記して感謝の意を表したい。

岩永省三、沢下孝信、杉村幸一、武末純一、堤研二、西谷正、土生田純之、福尾正彦、松永幸男、村上久和、渡辺芳郎、横山浩一

(敬称略、五十音順)

(註)

(1) 韌帯や軟骨の腐朽完了には土中で5年ほどかかるといわれているが(古畑一九六四)、横穴墓のような状況に類似した事例としては、近現代の改葬墓があげられる。これによると、カメ棺に葬った遺体を七回忌で改装すると頭と脊椎骨がついたままであるのに対して、一三回忌で行うとそのようなことはないという(伊東一九七四)。したがって、横穴墓においても韌帯や軟骨の腐朽には一〇年ほどを見込む必要があるだろう。

(2) 7号墳では墳丘周溝内からも須恵器が出土している。これは初葬時というよりは、全ての埋葬を終えた後に行われた祭祀に伴うと考えられるが、これも6世紀中葉に属するものである。

文献 (日本関係)

池田次郎一九八五「横穴墓被葬者の親族関係(1) 島根県能義郡広瀬町本郷上口遺跡—シンポジウム国家成立前後の日本人—」

『季刊人類学』一六一—三

伊東宏一九七四「人骨改葬を伴う愛知県渥美町(高木)と旭町(浅谷)の両墓制」『葬送墓制研究集成』1 名著出版

今井堯一九八二「古墳時代における女性の地位」『歴史評論』一三二

小林行雄一九五九「古墳の話」岩波書店 東京

近藤義郎一九六六「古墳とは何か」『日本の考古学』IV 河出書房新者 東京

田中良之・土肥直美・船越公威・永井昌文一九八五「上ノ原横穴墓被葬者の親族関係」『上ノ原遺跡群』IV 大分県教育委員

会 大分

田中良之・土肥直美一九八六「古墳被葬者の親族関係について」、『日本考古学協会台五二回総会研究発表要旨』

田中良之・土肥直美一九八七「古墳時代の親族関係について」、『九州人類学会報』一五

田中良之・土肥直美一九八九a「人骨と血縁」、『古代史復元』4 講談社 東京

田中良之・土肥直美一九八九b「出土人骨から親族構造を推定する」、『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』クバ

プロ 東京

辻村純代一九八三「東中国地方における箱式石棺の同棺複数埋葬」、『季刊人類学』一四—二

辻村純代一九八八「古墳時代の親族構造について」、『考古学研究』三五—一

土肥直美・田中良之・船越公威一九八六「歯冠計測を用いた血縁者推定法と古人骨への応用」、『人類学雑誌』九四—二

古畑種元一九六四『簡明法医学』

間壁葎子一九六二「出土人骨の性別よりみた古墳時代社会の一考察」、『岡山県史学』一二

松下孝幸「山口県朝田墳墓群第Ⅱ地区出土の人骨」、『朝田墳墓群』V 山口県教育委員会 山口

水野正好一九八二「向原第6古墳の被葬者」、『向原古墳群—第6古墳群発掘調査報告書』鳥取県大山町教育委員会 鳥取

村上久和・江田豊・友岡信彦編一九八五「上ノ原遺跡群」IV 大分県教育委員会 大分

山口県埋蔵文化財センター一九八二『朝田墳墓群』V 山口県教育委員会 山口

〔付記〕小稿は、平成元年度文部省科学研究費補助金（一般研究C、課題番号〇一五一〇二四五）による研究成果の一部

である。